
黒い瞳と紅い瞳

五月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い瞳と紅い瞳

【Nコード】

N8005L

【作者名】

五月

【あらすじ】

異世界召喚ファンタジー恋愛風味。間違いで召喚されてしまった女子高生の佐久間陽菜が、元の世界に帰れるまで異世界を堪能しつつ美形なおじ様と恋をする……。のか？基本ほのぼのしています。

00: prologue

太陽が眩しい季節。

友達もでき、部活も始まり、新しい生活にも慣れてきた。友達は明るく面白い子ばかりだし、バレー部の先輩は厳しいけどそれ以上に優しい。

この高校生活、なかなか好スタートを切れていると自分でも思う。これぞ順風満帆だ!!

そんなふうにかえていたのが、いけなかったのかもしれない。

水戸黄門も人生楽ありや苦もあるさと歌っていたではないか。・・・あれ？あれは別に黄門様が歌ってるわけじゃないんだっけ？ていうか、チョイス古いな、私。

・・・とにかく。良い事の後には悪い事がつきものなのである。

そんな訳で、私、佐久間陽菜さくまひなは只今絶賛異世界旅行中です。

どんな訳だ！・・・さみしい

部活終わりの帰り道。

高校生となり、めでたく電車通学デビューを果たした私は駅から家までの短いようで長い道程みちのりを歩いてきた。
辺りは既に暗く沈み、電灯の光だけが道路を微かに照らした。

「ああ……今日の部活も疲れたー！先輩厳しすぎ！」

陽菜の不満げな声が、人気のない道に響いた。
何だか不気味だ。
いつもはこんなに静かだったっけ？

「なんか変な感じ……。お、お化けとかでないよね？」

ガササツ

「ひいひい！！」

風で揺れる葉の擦れる音に、過敏に反応してしまった。
は、恥ずかしい……。
1人でなにやってんだろ私。
これではただの痛い子だ。

「……早く家に帰ろう」

肩を落とすと、また、とぼとぼと歩き出した陽菜の耳に可笑しな音が聞こえた。

『……つ……あ……い……ぞむ。われ……力……す……』

「なにこれ」

咄嗟にその場に立ち止まり、耳を澄ませてみるものの音はよく聞き取れない。

いや。これは音じゃない。……声？歌ってるみたいだけど……。

こんな時間に私がいる場所に届くほどの大声で歌う人が、果たしているのだろうか？

いたとしたら、その人は間違いなく変人さんだ。

『……繋が……びら……招きた……も……』

ドサリと教科書の詰まった鞆が肩から滑り落ちたが、そんなことはどうでも良かった。

歌に魅せられたように、私の身体はピクリとも動かなくなっていた。

陽菜の足元が、円を描くように青白い光を発した。

その円をよく見てみると、ビッシリと細かい文字で埋め尽くされている。

こゝこれはまさか……！！

「魔法陣！？えっ嘘！本物？夢？」

慌てる陽菜を余所に、青白い光はさらに輝きを増していく。

「ちよっ！待って！たんま、たんま！動け私い！！」

陽菜の叫びに対して、身体の方は一向に動こうとしない。
まるで、私の身体じゃないみたい。

陽菜が泣き出しそうになった、その時

『おいで』

「っ！」

陽菜は光に包まれた。

0001010300 (後書)

01…はじめまして

「……う」

身体の右側が冷たい。ていうか硬い。痛い。

「ったあ」

何故かとてもダルイ身体に力を込めて、ゆっくり起き上がる。
陽菜がいた場所は薄暗く、そこはかたなく妖しい雰囲気を漂わせていた。

でも、いかにもな感じの赤黒い染みが壁に付いていたり、生贄に使われる動物が吊るされているようなことはなかった。一安心。

わたしはこの部屋の床に寝転んでいたようだ。

「……どじ、じじ」

私の足元には、あの時に見た魔法陣が描かれている。

「……」

小説の中だけだと思っていた異世界召喚を、まさか私が体験することになるとは……。

人生なにが起こるか分からない。

もしこれが小説と同じなら、私は勇者になって魔王を倒しに行かなければならないのだろうか？

・・・無理だ。

私は剣道を習っているわけでも、柔道を体得しているわけでもない。身体能力もまさに人並みだし、頭も良くない。ただ1つ、5年間続けているバレーボールのサーブの威力だけは自信があるが・・・そんなものが役に立つ日が来るとは思えない。

それにしても、全く人が来る気配がない。

まさか忘れられてる?!

.....。

「なんなのよ」

ああ、涙がでそうだ。

『……っ!』

「え?!」

今、人の声がした!!

『召喚式が輝いてるのに、そのまま放つて置く馬鹿があるか!』

『す、すみません!まさか、あ、成功する、と、は思わなくて……けほっ』

『お前が喚んだんだから最後まで責任を持って!』

『だ、だって、化け物が、っ、出てくるかも、と、思ったら、怖くなっ、ちゃって……!』

2人いるみたいで、走っているのか、片方は息も切れ切れだ。

声はどんどん近付いてくる。

ていうか、“まさか成功するとは”ってなんだ。“化け物が出てくる”ってなんだ。

勇者様を召喚したとかじゃない事は分かったけど、何か腑に落ちない。

嬉しいような、残念なような……。

……特別な力が授かっているかもとか、ちょっと、ちょっと期待してたのに。

『……入るぞ』

『はいいい……』

ボタン!

「ん？」

「え？」

「……はじめまして」

扉から入ってくる光が眩しくて眼を細めながら、よく見えない2人の異世界人に向かつて、私は小さく頭を下げた。

02：子犬と美人と謝罪と

私が連れて来られた場所は、2階のバルコニーだった。
そこには小さな真つ白い机と、3脚の椅子があり、私は今その中の
1つに腰かけている。

光の眼が慣れた頃、改めて2人の人物を見て私は物凄く驚いた。
2人とも相当のイケメンだったのだ！！

膝に手をついてゼーゼー言っているのは、愛らしい顔をした男の子。
茶色の髪は先がくるりと跳ね、緑色の瞳はくりくりしている。私と

同じか、それ以上の歳のはずなのに、可愛い子犬を連想させる。

その男の子を叱っていた（であろう）、もう1人の人物は……
……… 凄い美人さんだった。

“ 絵にも描けない美しさ ” とは、この人のことを言うのかもしれないと半ば本気で考えてしまうほど、洗礼された美しさだった。長い銀の髪がさらさら流れ、紅い瞳は強い意志の輝きを秘めている。

あまりの衝撃に（そう……衝撃なのだ！！）頭の中が真っ白になり、呆然とその男性を眺めることしかできなかった。

ちなみに、なぜ男だと分かったかというところ、その人が（なぜかは分からないが）服の前を肌蹴っていて、真っ平らな胸と細身ながらもしなやかな筋肉がついているのが見えたからだ。歳は22、3だろう。

「ディアさんの美貌は世界を超えるんですね」

私の様子を見てか、子犬少年が美人さんにそんなことを言っている。

「なに意味分からないこと言ってるんだ」

眉を寄せる様さえも美しいこの方はディアというらしい。
名前もなんだか綺麗だ。

ふいにディアさんがこっちを向いたので、私はビクツと過剰反応してしまった。

「一応確認しておくが、お前、俺達の言葉は分かるか？」

「あ……はい！分かります！」

まさかのお前呼びに驚いて、応えるのが一瞬遅れてしまった。

「良かった！言葉が通じるって凄くありがたい事なんだねえ、デイアさん！」

「ロツソ。少し黙ってる」

「はい」

子犬少年の名前はロツソというらしい。

思わずローソンを思い浮かべてしまった私は、意外と冷静じゃないのかもしれない。

「ここじゃなんだ。移動しよう。構わないか？」

デイアさんは結構、高圧的な喋り方をする。その事に不快感を感じないのは、この人の人徳だろうか？

私は素直に頷いたのだった。

現在

オタク系の友人がわざわざ描いて見せてくれたモノとはまったく異なる、淡い青色を基調とした清楚なメイド服に身を包んだ給仕さんが、琥珀色をした液体を高そうな白いカップに注いでくれている。匂いからして紅茶だろうとあたりをつけてみるものの、ここは異世界。一体何の液体なのか非常に気になるところだ。

「これはウバ茶にジェリムの実を濾して入れてあるんだ。ウバ茶は知ってるか？」

私の表情から色々と察してくれたらしいディアさんが、わざわざ説明してくれた。

「・・・私の世界にもウバ茶って名前の茶葉がありました。同じものなんでしょうか？」

「さあな。まあ、一杯飲んでみるよ」

「うう・・・はい」

私の視界のど真ん中で、ロツソ君が美味しそうにこのお茶(?)を飲んでいる。というか、流しこんでいる。給仕のお姉さんも心得ているのか、一瞬にして無くなるカップの中身を、リズム良く注いでいる。あれだ。蕎麦の大食いみたいだ。

私の右隣に腰かけたディアさんも上品にカップを傾けている。

何をしても絵になる人だなあ・・・。

感心してディアさんを眺めていると、眼が合つて、私も飲むように無言で促された。

の、飲みますよう！

「……………」

ごくり

「おいしい……」

なにこのお茶！美味しい！物凄く美味しいよ！！

紅茶の芳ばしい香りと、程良い酸味。そんでもって、果物特有のくどくもなく、あつさりしすぎない自然な甘さが口いっぱいに広がって、思わず頬が緩んだ。

「でつしょー！このお茶はディアさんが淹れたから格別に美味しいんだよ！」

「え！このお茶ディアさんが淹れたんですか！」

とつさにディアさんの方を向くと頷かれた。

美人でお茶淹れるの上手いとか何だそれ！？これで女の子だったらディアさんモテモテじゃないか！！

空気が微妙に和んだところで、ロツソ君が立ちあがって頭を下げた。

「僕の不手際であなたを異世界から無理矢理召喚してしまい、申し訳ありませんでした！」

……！？

突然の謝罪にどうしていいか分からずディアさんを見ると、「きちんと聞いてやれ」と言われた。

な、なに！？なんなの？？

「貴女には心配する御家族や御友人がいらつしやるでしょう。もちろん、貴女がここで生活する間の衣食住は用意しますし、ロツソ・スカルノの名に誓って必ず貴女を元の世界へお返しします。しかし、僕が魔法式の最終見直しを怠ったことがすべての原因です。どんな罰でも申し付けてください。」

そう言ったままロツソ君は顔を上げない。
どないせえっちゅうねん！

困った私は、やっぱりディアさんの方を見た。そんな私を見かねたのか、ディアさんが口を開いた。

「お前はこいつに召喚された」

「はい」

「召喚者は召喚したものに責任を持って、というのがこの国の法だ」
「へえ」

「お前は元の世界に帰れる。これは俺のディア・アイライズの名にも誓おう。それと、ロツソによってこの世界にいる間のお前の衣食住も保証された」

「はい」

「だが、むかつくだろう？」

「は？」

「いきなり召喚されて、家族、親友から離されて、文化が全く異なる異世界にただ1人放り出されて」

「……」

「その代償を払わせてくれと、こいつはお願いしてるんだ」

「……」

「何でもいい。ソレに見合うだけの罰なりなんなりを、こいつに与えてやってくれ」

「……」

どうしよう……。困った。

そりゃあ、突然の異世界召喚には驚いたし、家族や友達と会えないのは寂しい。

でも今、ロツソ君とディアさんが絶対元の世界に返すって約束してくれたし……。いや、まあそれがどれくらい時間がかかるのか分からないけど。

あ、それでいいか。

「……。あの、ディアさん……」

「ん？」

うっ、首を傾げたディアさんの威力半端ないな……。

くそっ！羨ましくなんか無いんだから！！

「……どんな仕事よりも最優先して、私が元の世界に戻るようにすること！って……。ありますか？」

「……………いいんじゃないか？ロツソ？」

「……………それでいいんですか？」

やっと顔を上げたロツソ君が不安そうな、不満そうな顔をした。

「もっとこう……。一発殴らせるとか、お前今日から私の奴隷ね！

とか、ここから飛び降りろ！とか」

「な、なにその例え」

最初のはともかく後の2つは……。いいのか？！

「えー。でもこれ、昔ホントに下された罰なんですよ？」

「どんなサディストさんっ?!」

こ、怖く……。奴隷って、まさか女王様？んな馬鹿な。

「どんな無理難題だされるのか楽しみにしてたのに……」

「それはそれでどうなのかと……」

ん？待てよ。ってことは、私以外にも間違って召喚された人がいるってこと？

「あの一私のほかにも召喚された人って……！」

「ああ、いるぞ」

「！」

やっぱり！……でも、ちょっと返事が早すぎるぞ、ディアさん。もしかして、私がこのことを聞くなって分かってた？

03・召喚式の歴史と改めましてこんにちは

謝罪を終えたロツソ君が元の席に着いた。心臓に悪いからもうやめてね。

「ここ百数年はないですけど、昔は間違えて召喚とかよくあったらしいですよー」

「昔は今ほど召喚式のことを解析出来てなかったからな。何が出てくるか分からないなか、文字通り命を懸けて召喚してたわけだ」

「今回の貴女ように人の形をしていて、話も通じて、意思疎通もできる。これはその時代の召喚師にとつたら奇跡にも等しかったんですよ。出てくるのは殆ど言葉も通じない化け物ばかりだったらしいですから」

「な、なんでそんな怖い事続けてるんですか？やめればいいじゃないですか」

何をさらっと言っているのか。

命懸けって、何人も死んでるってことだよね！？こわっ！

「んゝまあ、そうなんですけどー」

「もともと召喚式は異世界の者を召喚するために作られたものではないんだ」

「え？」

「この世界には精霊と呼ばれるものが存在している。それを呼び出し、姿を形成し、契約するために考案されたのが召喚式だ」

「つまり！精霊を召喚した筈がよくわからない謎の生命物体がでて

きちちゃったーってことです」

「ええ〜。なんですかそれ……。ていうか、やっぱり精霊いるんだ」

精霊かあ〜

一度でいいから見てみたいな。やっぱり美人さんなんだろうな。ふふふ

「なんだ？お前のところにも精霊がいるのか？」

「あつ、いえ、精霊はいないんですけど、お伽噺っていうか、伝説というか。物語の中にいます。ほかにエルフとか、ゴブリンとか……。え〜つと、後何がいたっけ……。あ！ドラゴンとかも全部空想上の生き物です」

「物語の中……。か。ゴブリンが何か分からないが、エルフとドラゴンはいるな。ほかにキラウルフとかケヴィクとか……。知ってるか？」

「いえ、そこらへんはサツパリ」

「へ〜おもしろいですね」

ロツソ君はにこにこしながら、そんなことを言う。

ゴメン。何が面白いのかお姉さんには全く分からないよ。

「今更なんだが……。」

「？はい、何でしょうディアさん」

「お前、名前はなんて言うんだ？」

「！――」

「あ、」

し、しまった！自己紹介するのを完璧に忘れていた。

ここに連れてこられてからすぐにロツソ君が謝ってきたから頭から

すっぱ抜けていたみたいだ。

うーわー！私の馬鹿！そうだよね！名前わからないからディアさん私の事ずっとお前って呼んでたんだよね！ごめんなさい！！

あわあわしている私の目の前で、ロツソ君も今気が付いたという顔をしている。

「ご紹介がおくれました！わたくし、佐久間陽菜っついていきます！宜しく願いまする！」

やばい！焦り過ぎて変な日本語になっちゃった！なんだ、しまするって！

「サクマ・ヒナか。サクマが名前か？」

どきっ

な、なんだ、なんだ。ディアさんに名前呼ばれると変な感じがするぞ。

あれか！美人マジックか！ディアさんの声すごかつこいい。・・・物凄く私好みだ。

「・・・いえ、ヒナが名前です」

「ヒナちゃんかあ！僕はロツソ！よろしくね」

動揺のあまり、無愛想に返事をしてしまった私にロツソ君が愛らしい笑顔を向けてくれた。この子はなんて可愛いんだ！お姉さんの母性本能擦りまくりだよ。年齢たいして変わらないだろうけど。

「よろしくロツソ君」

「うん！」

くっすっす、っ、可憐いじゃないか！

03・召喚式の歴史と改めましてこんにちは（後書き）

総合PV900越えありがとうございます！！

嬉しすぎて頭爆発しそうです

週一更新になりそうですが頑張つて続けていきますね）、）、

キラウルフもケヴィクも捏造魔物です

ディアさんが自己紹介しなかったのは

もう名前知ってるからいいよね？と考えたからです

04：事実は小説よりも奇なり

「ところで、ここどこなんですか？」

「アンヴァイト大陸セルクル王国の首都アシレルだ」

「あ、アンブト大陸のセルルク王国、首都アシラル？」

「アンヴァイト大陸のセルクル王国、首都アシレル」

「アンヴァイト大陸、セルクル王国、首都アシレル！」

「よろしい」

小学生の戻った気分だ。しょうがないよ、ここ異世界だしね！

それにしても……ディアさん。その眩しい笑顔を真っ直ぐ向けるのはやめて下さい。

赤ちゃんに初めて名前を呼ばれたお母さんみたいな顔してますよ。

無駄に心臓がバクバクする。私はそっとディアさんから視線をずらした。

「ちなみに、ここはセルクル王が住まうデベール城の中にある試験塔の休息場所です」

「えー！ここお城の中なんですか！」

「城の中というより城壁の中っていったほうが正しいけどな」

「ヒナちゃん、あっち見てみて」

ロツソ君が指差した方を見ると、綺麗な青空の下に白いレンガの建物が少し覗いている。

「ここからだ物凄く見にくいんですけど、あれが僕達の主が住まうデベール城です。今日のような天気の良い日に見ると壮観ですよ」

「デベール城はセルクルの観光名所の一つで、世界に2つとない美しい城だと言われているんだ」

ロツソ君とディアさんの誇らしげな顔を見た私はなんだか嬉しくな
った。

「へー！素敵！ちゃんと前から見てみたいな」

「これからいくらでも見る機会はあるさ」

「そうですね！楽しみです」

ほんのちよっぴり見える壁から、デベール城の姿を想像する。

白い壁が光を反射してキラキラしているのが分かった。すっごく綺麗なんだろうなあ

「セルクルは商業でも有名なんですよ。落ち着いたら一度遊びに行きましようね」

「ああ、それはいいな。うまい飯屋なら俺にまかすとけ」

ロツソ君の提案にディアさんがさつきとはまた違った笑顔を浮かべながらそう言った。とっても楽しそうだ。

もしかしてディアさんは食いしん坊なのかもしれない。そう考えると、この美貌の君に親しみを感じた。私も美味しいものは大好きだ！

商業の国かあ。楽しみだな！異世界堪能しちゃうぞ〜

私は、まだ見ぬ異世界の町に思いを馳せた。

にやにや

傍から見たらさぞ怪しいだろう。

「まあ、観光については今は置いて、ヒナちゃん」

「はい」

「たぶん勘違いしてるだろうから教えとくね」

勘違い？

私が何か勘違いするようなことがあっただろうか？

は！もしやディアさんは本当は女の人だったとか！？ありえる！
でも私、裸（上半身）見てるからなあ

「会った人みんなが騙されるんだけど、ディアさん今年で42だよ」
「別に騙してるわけじゃないだろう。これは血筋だ」

「それにしても限度つてものがあるでしょー。ディアさん鏡見てます？」

「失礼だな」

「……………へ？」

「ヒナちゃん。ディアさんは42歳なんだよ」

「よんじゅう…に？ディアさんが？」

「そうそう。あ、ちなみに僕は17だよ」

うん。ロッソ君は予想通り。私の1つ上かあ。
つて

そ…ん…な…こ…と…よ…り…！ディアさんが42歳ってどついつい
とだあ！！

多く見ても二十歳後半にしか見えんぞ！

「うつそ〜……………」

「事実だ。先月なつたばかりだが」

「え、あ、誕生日おめでとつございます」

「……………あぁ」

ディアさんがちょっと驚いた顔をしている。そーですよねー今更誕

生日おめでとございますも何もないですよね。落ち着け！私の思考回路！

でも、そっか、42歳。26歳差かあ。おつきいなあ。意外な事実が発覚してしまった。

もしディアさんが私の世界にいたら、妙齢のお姉さま方から質問攻めにされるんだらうな。

「なんかもう詐欺ですよね」

「ですよね。僕もそう思います。この顔に騙された男は数知れず・・・」

「男・・・ディアさん綺麗ですもんね」

「そうなんですよ。よく女の人に間違われるんですけど、本人あんまり自覚がなくて。これでも最近ちょっとマシになってきたんだけどね」

「へ・・・お疲れ様です」

「あはは」と困ったように笑うロツソ君は、意外と苦労人なのかもしれない。

ディアさんは無自覚にいろいろ誑し込んでそうだ。天然って怖い！

「ディアさんの場合は稀に確信犯だから性質が悪いんだけどね」

「え？」

「ロツソうるさいぞ。ヒナもこんな話聞いてないで、紅茶を早く飲み。冷めるぞ」

「うわ、はい！」

いきなりの名前呼びに顔が熱くなった。きよ、凶器だ！美人怖い！心臓止まるかと思った！

赤くなつた顔を隠すために慌ててカップを傾けた。ディアさんが淹れた紅茶は冷めていても十分美味しかった。

04：事実は小説よりも奇なり（後書き）

総PV1000越えありがとうございます！

現実味がなくて逆に怖くなってきました

これ夢じゃないですよね？

05：衣食住の『住』 1

「あのお二人さん」

「なに？」

「なんだ？」

うわ！一気に注目を集めてしまった。てれるてれる。

「えっと、こんなにゆっくりしててもいいんですか？お仕事とか」

「あー！」

「……忘れてたな」

「どうしよう、ディアさん！僕まだヒナちゃんを召喚しちゃったこと報告してませんでした！またクドナさんに怒られちゃいます！」

「それは自業自得だろう」

「ディアさん冷たい！」

「まあ、報告が遅くなったのは状況を説明していったってことでどうにかなるだろう。ヒナを呼び出したことはキツチリ絞られるだろうけどな」

「うう〜」

「え、あの、なんかすみません」

「謝らないで！全部僕が悪いんですから。うん、そうだよ。僕クドナさんにキツチリ絞られてきます」

「よく言ったロツソ。骨は拾ってやる」

「……はい」

ロツソ君がしょぼんと肩を落とした。それにしてもこの2人仲良さだ。ディアさんと軽口が言い合えるなんて羨まし……何を考えてるんだ私は！うおおおおお！

私が1人身悶えている間も2人の会話は続いている。

「ところでロツソ、ヒナの衣食住を保証するとか言ってたけど大丈夫か？お前、寮暮らしだよな」

「あう・・・やっぱり寮はダメですかね。女子寮に入っちゃうと気軽に様子を見に行ったりできないし・・・だからといって、男子寮には絶対入れられないです」

「あそこは臭いが酷いからな。何度か気が遠くなったことがある」
「そうなんですよ。皆さん全然掃除しようとしなくて、いつも僕が・・・って、違いますよ！狼がウロウロしているとところに子うさぎを一匹放すわけにはいかないでしょう！ヒナちゃん可愛いから一口でパクツですよ！パクツ！」
「分かってるよ。で、どうするつもりだ？」

ロツソ君、お世辞はいいよ。お姉さんはその言葉だけで十分だよ。ていうか、女神すら霞みそうなご尊顔のディア様を前にしたら私なんて紙屑以下。あ、自分で言っというて泣きそう。

ディアさんはあくまで無表情だ。冗談なのか本気なのか掴めない。表情がないディアさんは彫刻のように美しい。はじめて会った時と同じように私はポーっとディアさんを見つめた。うん、眼の保養だ。

「・・・・・・・・・・あの、非常に言いにくいんですけど」

「・・・・・・・・・・大体予想できるが、一応言ってみる」

「お願いします！ヒナちゃんをディアさんのところで預かってもらえませんか！？」

「・・・・・・・・・・」

「もちろんヒナちゃんに使うお金は僕が払いますから！後払いで！」
「・・・・・・・・・・」
「わかった。ちょうど」

フィオリルが1人でつまらないと愚痴つてたところだしな」

「あ！フィルちゃん元気ですか？僕最近会えてないんですよ」

「相変わらずだ。暇が出来たら会いに来てやってくれ。最近あいつ、つまらないしか言わないんだ」

「はあ。フィルちゃんにとつて平和は退屈なんでしょうかね」

「別に平和が嫌いなわけじゃないさ。ただ何もなくていいって状況に慣れてなくて不安なんだろう」

「うん。難しいですね」

「フィ、フィロルリ？違う違う。フィオリル？ちゃん？誰だろう？ん？ちよつと待てよ。その前にもつと重要な・・・」

「ちよ、ちよちよちよちよ！ちよつと待って！！私、ディアさんと一緒に住むんですか！？」

「え、うん。そのつもりですけど」

「何か不都合があるのか？」

「不都合ってどうか、あの、え〜！」

「あ！大丈夫ですよ！ディアさんの理性の強さは化け物並みですから！」

「そ、そそそそーゆつことを言ってるんじゃないですよ！」

「ロツソ君の理性の強さうんぬんという言葉に赤面してしまった。

可愛い顔してなんて爆弾発言を！高校生男子なんて皆こんなもんなのか！？・・・ちよつと違うか。

「・・・嫌なら無理には言わないが」

「あああああ！ディアさんそんなちよつと寂しそうな顔しないでください！！」

「罪悪感が湧き出てくるではありませんか！」

「い、いえ！決して嫌なわけでは……」

「だ〜いじょうぶですって！別に2人つきりって訳でもないですから」

「お前、他人事にするなよ。召喚者だろ」

「そんなつもりは無いんですけど」

「うう……2人つきりじゃないって、さっきのフィ、フィル……
フィオルじゃないフィオルちゃん？も一緒ってことですか？」

「そうだ。……失礼だが、ヒナは今いくつだ？」

ディアさんがちょっと困って様な顔で聞いてきた。

大人の女性扱いをしてくれているのだと気が付いて嬉しくなる。

もう！ほんつっつとにイイ男なんだから！歳くらい、いくらでも聞いて！

「16です」

「そうか。ならフィオルルが23だから7つ差ってことになるな」

「丁度良いんじゃないですか？姉妹みたいで」

「わ！お姉ちゃんですか！私兄弟いないので楽しみです」

小さい頃からお姉ちゃんお兄ちゃんのいる友達の愚痴を聞いていて
凄く羨ましかったのだ。

兄弟っていうのは、両親よりも身近にいる気がする。実際はいない
から本当はどうなのか分からないんだけどね。

「そーゆーことなんだけど……いいかな？」

「さっきも言ったが、無理はしなくていい。俺のところは嫌なら寮
でもかまわないし」

「手続きが面倒ですけどね」

「……ロツン」

「あ……すみません。……ヒナちゃんは何も気にせず好きな方を選んでください」

あ、あれ？ディアさんの顔が怒ってるように見えるぞ。何で？私なんか地雷踏んだか？

そんな私の顔を見たディアさんがちょっと困ったように微笑んだ。やめて！眼の前が霞む！

ロツソ君はバツが悪そうにポリポリと米神を掻いた。

「あーうん。あんまり気にしないでヒナちゃん。僕が悪いだけですから」

「う、うん」

「で、どっちにする？」

気にしないでと言われても！

……ロツソ君が自分が悪いって言ったってことは、ロツソ君が何かしでかしちゃったってことだよな？
ディアさんが怒る前。えっと、何言ってたっけ？

『手続きが面倒ですけどね』

そうだ！確かそう言ってた。これの何がダメなんだ？
う~~~~~ん

『召喚者は召喚したものに責任を持って、というのがこの国の法だ』

あっ

もしかしてこれか！ロツソ君が面倒くさいって言葉を無責任だ！って怒ったとか？

ディアさん細かすぎるよ！私そんなの気にしないよ！！

……でも、そうか。
私の為(?)に怒ってくれたのか。

自信ないけど、きつとそう！ディアさんは私の為に怒ってくれてんだ！・・・と、思おう。うん。

「わ、私は、そうですね。ディアさんのところがいいです！」

「・・・本当だろうか？」

「気を遣わなくてもいいんですよ？」

「いえ。ディアさんのところがいいです。気なんか遣ってません」

「もしかして僕のせいだったりする？」

「しません。私はディアさんのところがいいから、ディアさんのところがいいって言ってるんです」

これだけ何度もディアさんのところがいいって言うのは恥ずかしいけど、はつきり言うよ。

ロツソ君の言葉を気にして言ってるんじゃないやありません！

ディアさんのところがいいんです！

私の心意気(?)が伝わったのか、ディアさんもロツソ君も頷いてくれた。

「なら、さっそく案内しないとな」

「ディアさんよろしくお願いします。僕は叱られてくるので・・・」

叱られると言葉にしたとたんロツソ君の周りにどんよりした空気が漂う。

「が、がんばってー！」

「うう・・・ありがとうございます」

フラフラと立ち去って行くロツソ君を2人で見送ると、ディアさんが手を差し出してきた。

「え？」

「手を出せ。いくら試験塔だからといっても迷われたらすぐに見つけてやれる自信がない」

「え、えつと、それは手を繋ぐってことですか？」

「あたりまえだろう？」

ああ！だからディアさん首を傾げてこっちを見ないで……。でも、そつだよー。私とディアさんって親子ぐらい歳離れてるもんね。

「ほら」

「.....」

私は何か腑に落ちないものを感じながら、ディアさんの手を握った。ディアさんの手はすべすべで、柔らかい。ほんとに42の男性なんですよね！？ちよつと私自信失くしちゃうよ！！

05：衣食住の『住』1（後書き）

PV20000 越え

ありがとうございます！

誤字脱字、おかしい日本語があったら是非教えて下さい

06：衣食住の『住』2

長い。遠い。疲れた。

あの後。

手を繋いだ私とディアさんは試験塔から出て、兵士さん達の寄宿舎の傍を通り、貴族街（この国の大貴族の本邸が集まってる場所だつて）を突っ切った先にある小さな林の中の家に来ている。

「さあ、着いた。ここが俺の家だ」

「わあ・・・」

2階建てで、全体が薄水色をしている。レンガの家特有の優雅さというか柔らかさがあり、質素そうに見えてドアや窓枠には細い模様が彫り込んである。シンプルでお洒落な家だった。

ディアさんの外見からして、もっとこうチャラチャラゴテゴテした家なのかな？と思って

ただけど、良い意味で期待を裏切られた。庶民の私は、ちょっと前に通った貴族の家・・・あれは家なんて可愛いものじゃないな。あの小さなお城のような場所だったら緊張し通しだったと思う。

うん。とっても素敵な家。

日本に戻れるまで、ここが私の家になるんだ。

そう考えると感慨ぶかくて、じっと『我が家』を見つめた。

私がこの家を眺めている間、ディアさんは何も言わずに待っていてくれた。

ちなみに、私達が飲んでいた紅茶（？）の後片付けはメイドさん達がやってくれたみたい。

私はすっかり忘れてただけで、ロツソ君が頭を下げた時に部屋の隅に移動していたらしい。空気の読める有能なメイドさんだ。

閑話休題。

私がディアさんのほうに顔を向けると、にこりとほほ笑んでくれた。ま、眩しい。

気を使ってくれていることは分かったので、私もディアさんに笑い返す。

しかしですね、ディアさん。私にはちょっと刺激が強すぎますよ。

「たいして広くないが、部屋は用意してある。悪いがそこで我慢してくれ」

「わかりました」

「……………あれ？」部屋は用意してある『って、いつそんな連絡してたんだ？

あ、ロツソ君が知らせてくれたとか？でも、怒られに行くっていつてたし…………？

・後で考えよう。それでも分んなかったら聞けばいいか。

ディアさんが先に進んでドアを開けてくれた。レディーファースト

だ！

家の中は薄い色を基調とした家具が、いつか見たモデルルームのようにお洒落に配置されており、それぞれの物が大切に遣い込まれているのが分かった。この家に住む人の暖かさを感じる部屋だ。

私はより一層この家が気に入った。ディアさんってセンスいいんだね。

「まず、ここがリビングだ。歩いてばかりで疲れただろ？案内する前にお茶でも飲もう」

「！やった！！ありがとうございます」

私が何も言わなくても疲れていることに気が付いてたのか。

は！これがあの噂に聞く心理眼！さすがディアさん！！

ディアさんはまたあの何とかの実を濾した紅茶を出してくれた。しかも今度はお菓子付きだ。一口大のクッキーのようなもので、バター（たぶん）がたっぷり入っていて物凄く美味しい。何個でも食べられちゃうよ！

ちなみに、このクッキーもディアさんの手作りらしい。ほんと、良

いお嫁さんになれるよね。

「よし。そろそろいいか？」

「はい！御馳走様でした！」

「おう」

ささっと、私の分の皿とコップも持ってディアさんはキッチンに入
って行った。この部屋のすぐ隣に大きなキッチンがあるのだ。
料理は作るのも食べるのも好きなんだって。

「じゃあ、まず1階からな」

「はい」

「1階はこと隣のキッチン。で、この廊下の奥にあるのが客間
だな。まあ、使う機会はほとんどないんだが……。一応見てお
くか？」

「見たいです！」

「たいしたモノじゃないが……」

またもや、ディアさんのレディーファースト。

なんか私、日本に戻ってやっていけるかな。お嬢様癖がつきそうだ。
頑張れ庶民魂！

「おお」

いままで居たのが暖かくて優しい部屋だとしたら、ここは他人行儀
で厳粛な感じ。

10畳くらいの部屋にごつくて高級そうなソファが向かい合うよ
うに2つ。額縁の中には種類の分からない薄紫の花の絵。足を柔ら
かく押し返してくるのは焦げ茶色の柔らかい絨毯。これまた高そう
だ。

なんて言うか……この部屋では、ちょっと騒ぐのも躊躇われる。私ここ無理だ！無駄に緊張しそう。

「ここには食べ物持ち込めませんね……」

「なんでだ？」

「だってこれ、零したら大惨事ですよ。弁償できないです」

「ああ、ヒナには無理だな」

「……」

無一文だもんね。

1階は結局リビング、キッチン、客間、空き部屋2つの計5部屋だった。

一部屋一部屋が広いんだ、これが。もしかしなくともディアさんお金持ち？

「まあ一階はこんなもんだな。二階行くぞ」

「はい」

階段を上ると、ドアがたくさん並んでいた。

一階とは違って個室専用の階みたいだ。

「奥から、空き部屋、空き部屋、書斎、俺、フィオリル……で、
ここがヒナの部屋、空き部屋な」

階段の前から一歩右にずれた場所。

私は一人っ子で自分の部屋を持っているんだけど、何だかワクワクするというかドキドキするというか……。ここが私の部屋かあ。

「中でフィオリルが部屋を整えてくれてるはずだ。入るぞ」

「！フィオリルさんに会うんですか！？ちょ、ちょっと心の準備が・

・

「何言ってるんだ。行くぞ」

「ひい〜」

フィオリルさん……

どんな人なんだろうなあ

06：衣食住の『住』2（後書き）

ヒナがやっと部屋の前まで辿り着きました。
長かった・・・・・・・・・・（、、；）

今週からテスト週間に入るので更新がものすごく遅れます

ごめんなさい……

見捨てないでいただけると嬉しいです（、・・、；）

お気に入り登録本当にありがとうございます！

07:1日の終わり

「フィオリル、入るぞ」
「どござ」

おお！扉越しの声で既にそうとうの美人だと分かるなんて・・・期待大！

・・・・・・ディアさんが男の人でこれなんだから、女の子はきつと凄いだらうなあ

あ、ディアさん毎度毎度レディーファーストありがとうございます。

ドアからそつと中を覗くと、私の方を見てにっこりと優しく微笑んでいる女性がいた。

長い髪を一纏めにアップにされていて、ところどころ細かい編み込みがある。髪を纏めている赤いリボンが鮮やかで、艶やかな濃紺の髪によく合っていた。睫毛はもちろん長くて、瞳の色は黄緑。薄紅色のワンピースのようなものを着ている。右肩についている花のコサージュが可愛い。

あ！もしかしたらドレスかも？うん。それにしても質素すぎるかな。ドレスはもっとキラキラゴテゴテなイメージ。部屋着とか？

それにしても美人さんだなあ・・・

「よう・・・し？」

「そう。私達、血は繋がっていないの」

血が繋がってなくてこの美しさ。

ディアさんは清廉系というか女神の像みたいな清らかな美しさで（男の人に清らかはどうかと思うけど）、フィオリルさんは妖艶？っていうの？上品な艶やかさがある。系統は違うけど、2人とも綺麗だ（男の人に綺麗は略）。

「十数年前に、な。時期も良かったし」

「時期？」

私が聞くと2人はちよつと笑っただけで何も言わない。

・・・もしかしなくとも聞いたらいけないこと聞いちゃった？

「え、えつと」

「あら、困らせてごめんなさい。その話はまた今度。機会があればね」

フィオリルさんが笑って流してくれた。

了解です。二度と聞きません。

「それと・・・貴女のお名前。教えてもらってもいいかしら？」

「あ」

私はことごとく自己紹介が遅れるらしい。

これからお世話になるのに失礼をしてしまった。

「さ・・・ヒナ・サクマです。これからよろしくお願いします」

「ヒナね。こちらこそよろしく。私の事はフィルって呼んでね」

「フィルさん」

「フィル」

「・・・フィルちゃん」

「うん。まあいいわ。それで許してあげる」

フィオリルさん。もといフィルちゃんがウインクしながらにこっと笑った。こういう悪戯っぽい顔もとても魅力的だ。モてるんだろうなあ・・・。

ディアさんと違って表情がころころ変わる。別にディアさんに表情が無いって訳じゃないけど、基本無表情だから・・・。まあ、笑顔の威力はディアさんの方が上だけだね！

「じゃあヒナ」

「はい」

「女の子のお話しましょうか」

「・・・は？」

「女の子の、お・は・な・し」

「お、女の子の話・・・」

「ということですからお父様。出てってくださいな」

「俺は邪魔者か・・・。話が終わったら下に降りてこいよ。晩飯用意しとく」

「キロロの実のスープが飲みたいわ」

「わかったわかった」

ディアさんはフィルちゃんの頭を一撫ですると、部屋を出ていった。

え？何いまの感じ。親子っていうより恋人同士みたいだったけど。異世界の親子のスキンシップはこんなもんなのかな？それにしても雰囲気甘いというか・・・うん。深く考えない。

「ヒナ、ヒナ」

「は、はい」

「この部屋どう？可愛らしくしてみたつもりなんだけど」

笑顔がキラキラしている。

年上だけど、可愛い。とっても可愛い。

『ヒナ、ヒナ』って呼ばれた時はキュン死にするかと思った。すごい威力。

フィルちゃんに言われてはじめて部屋の中を見回す。

シミ一つない白い壁に薄桃色のカーテン。木製のベットには柔らかそうなクリーム色の布団。掛け布とマクラカバーはカーテンと同じ薄桃色。床のカーペットは薄いオレンジ。窓の近くには木製の机、椅子付き。よく見ると角が全て削ってあって細やかな心遣いがある。

全体的に柔らかい雰囲気の部屋だ。とくに高級そうなものは置いてないし、この広さならまだ許容範囲内。

「すごく、いいです！可愛い」

「本当？喜んでもらえて嬉しい」

「あ、この部屋フィルちゃんが用意してくれたんですね！ありがとうございます」

「ふふ。どういたしまして」

今日からここが私の部屋。なんだかわくわくするなあ。

「それで、女の子のお話なんだけど」

「・・・はい」

女の子のお話ってなんだ。まさか今から恋愛トークが始まるのだからか？

「ヒナの世界とこの世界とじゃ、全然文化が違うと思うの。ヒナと私の服を見比べただけでも十分わかるでしょう？」

「はい」

確かに。いかのも西洋風のフィルちゃんの服と私の制服とではまったく系統が異なる。

あ、でもちよつとディアさんの服とは似てるかも。軍服を簡略化したみたいなの着てたけど、ディアさんの職業ってなんなんだろう？

「服の着方とかお風呂にお手洗い、あと月の日の対処とか・・・聞きにくい事だろうから今の内に教えておうと思って」

「あ！それはとっても助かります」

そういうこと、全くもって考えてなかった・・・！

いくら女の子っぽいからといって、ディアさんには聞けないし。ありがとうフィルちゃん！

「御馳走様でしたー！美味しかったです！」

「おう」

満腹満足な私を見て、ディアさんも満足そうだ。

だからそのキラキラ笑顔はやめて下さい。もつと光抑えて。

フィルちゃんがリクエストしてたキロロの実のスープはチーズを溶かしたみたいなミネストローネの味がした。最初はキロロの実「トマトかと思っただけけど、トマトは別にあるらしい。よくわかんない。

他に、麦パン（ディアさんの手作り！）、野菜のカヴル肉巻、ジェリムの実入りオムライス（もどき）。どれもとっても美味しかった！カヴルっていうのは鹿みたいな動物で、一般家庭によく並んでいるらしい。後、ディアさんはジェリムの実が大好きで隙あらば料理に突っ込んでくるんだって（フィルちゃん談）。

思い返してみると、夕方に召喚されて、お昼すぎから今まで起きている訳だから睡眠が足りない……。つまり、とつても眠い。

フィルちゃんにそう言うと、暖かいお湯とタオルを渡してくれた。

この国では家にお風呂がなくて、国営の公衆浴場（誰でもタダ！）に入りに行く。

今は丁度混雑する時間帯だから、家に戻る時間がものすごく遅くなってしまうらしい。それだと私の体力と気力が持たないと判断したフィルちゃんが気をきかせてくれたのだ。

「明日一緒にお風呂入りに行きましようね。おやすみなさい」

「ありがとうフィルちゃん。おやすみなさい。ディアさんも、おやすみなさい」

「おやすみ」

手早く身体を拭くと、フィルちゃんが貸してくれた寝巻を着てベツトに潜り込んだ。

布団はふかふかで、私はすっと眠りに落ちていった。

07:1日の終わり(後書き)

テスト無事ではないですが終了しました！
ので、さっそく更新

また週1ペースで更新しようと思っているんですが
今年、受験生なので時々不定期になりそうです…
御容赦下さいませ

(*)、() / PV7000 越えありがとうございます!!

08・夢(前書き)

ちよびつとシリ阿斯

『陽菜　！　いったよー』
『はーい！』

自分に向かって落ちてくるボールを力いっぱいアタックする。

パアーン！！

ピーーーーー！！

わああああああ！！！！！！

『やった！』

『よくやった！陽菜ー』

『陽菜ちゃん偉い！』

『ナイス！佐久間！』

『わー！ありがとう、みんな！！』

中学生生活最後の県大会決勝。

5対5の同点。残り時間27秒。

最後の最後で玲ちゃんからのトスを私が打って、勝利。

懐かしいなあ。あの後みんなが飛びついてきて、倒れたんだよね。

思いつ切り頭打った。

……は！私が馬鹿になったのはアレが原因かあ！

『陽菜！あんた何時まで寝てるの？』

『う、うん……』

『今日玲花ちゃん達と遊ぶんじゃなかったの？』

『……ああ!!』

『早く着替えて朝ごはん食べちゃいなさいよ』

『わわわわわ！忘れてた!!お母さん、ありがと!!』

前日に用意しておいた服にささっと着替えるとバタバタとリビングに駆け込んだ。

『お父さん！今何時!?!』

『8:19』

『後21分しかない！お母さんごはん!』

『そこにあるでしょ。あわててお茶こぼさないでよ』

『大丈夫!』

『朝から騒がしいな。いつたい誰に似たんだ?』

『お父さんだよ!!』

私のお父さんはちょっとおかしくて、平日は今日の私みたいに全く起きられないくせに、こういう休みの日は太陽が昇るのと同じ時間に眼を覚ます。

おかげで、平日の朝は私以上にバタバタしている。家を出るときにシャツのボタンを半分も留めないままネクタイを持って走り出ていく姿が、ご近所さんの日常の一部になってしまっているほどだ。

『じゃ、いつてきまーす!』

『いつてらっしやい』

『車に気をつけてなー』

『うん!』

『光里ひかりい数学どうだったー?』

『ふふん。聞いて驚け見ておのの慄け! じゃん! 96点!』

『・・・おぎやあ』

『対応が適当過ぎやしないかい? 陽菜さん』

『見てみて! 私7のぞろ目』

『え? そこスルーするの?』

『最近陽菜ちゃんななは光里のあしらい方上手くなったね』

『あ! 祐貴ちゃんたけし。ほんと? 嬉しいなあ』

『私は悲しい』

『うるさいさいぞ光里』

『酷い祐ちゃん・・・』

『祐貴ちゃんは点数どうだったー？』

『うつ・・・さ、31・・・だ』

『・・・アイスクリームだね』

『それ慰めになつてくない？』

『じゃあ光里が何とか言つてよ』

『無理』

『いや、いいんだ2人とも。こんな点数を取った私が悪いんだ』

『え、いや、あの』

『どんまいだよ！祐ちゃん。祐ちゃんには陸上があるじゃない！』

『・・・ああ』

学力テストきつかったな。

高校に入ってすぐのテストがあるとは思わなんだ・・・！

この時に祐貴ちゃんが勉強苦手だって判明したんだよね。

祐貴ちゃんはショートカットが似合う男子顔負けの男前な女の子で、中学校のころはよく女の子に囲まれてたつて光里が言つてた。口調もカッコイイし、運動も得意だし、優しいし、高校でフアンクラブが出来るのも時間の問題だね。

で、その祐貴ちゃんの幼馴染の光里。オシャレやショッピングには興味が無く、都市伝説や怪奇現象の為なら自腹で海外に行くことを躊躇わない、とってもアグレッシブな女の子。頭も良いし、妙な知識をいっぱい持つてる・・・不思議ちゃんかもしれない。

光里が私の今の状況知つたら、すごく羨ましがらるだろうなあ・・・

「う・・・」

あれ？私の布団こんなに柔らかかったっけ？それに花の良い匂いがする。おかしい。

「あ・・・私・・・異世界にいるんだっけ・・・」

布団があまりにも気持ちいので起き上がることはせずに窓の方を向く。カーテンを閉め忘れていたみたいで、大きな月が眼に入った。その色は私の世界の月と違って

紅い

なんだか怖くなって眼を逸らした。

（私・・・本当に異世界にいるんだよね・・・）

ポロポロ……

頬が濡れる。

懐かしい夢を見たせいなのか、ここが異世界だという事を再確認したせいなのか……

急に心細くなってしまった。

今になって、やっとロツソ君の謝罪した意味の重さが分かった。

「うっ……ううう……ひっく……うえ……」

次から次へと涙が零れてくる。拭っても拭っても止まらない。

そのまましばらく泣き続けた。

『お前は元の世界に帰れる。これは俺のディア・アイライズの名にも誓おう』

「う・・・ディアさっ・・・?」

ふとディアさんの言葉を思い出した。

『お前は元の世界に帰れる』

ヒンヤリしていた心に少し熱が籠った気がした。
今の今まで止まらなかった涙が勢いを落としていく。

ディアさんの顔を思い浮かべる。

彫刻のように綺麗な顔で優しく微笑んだディアさんは本当に女神様
みたいだった。

思えば、ディアさんと一緒にいたからこそ今まで平気だったんじゃないかなあ。

ディアさんの行動は全部私を気遣ってくれてるんだって感じた。お
茶もお菓子も美味しかったし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・晩ご飯、美味しかったなあ」

お母さんよりは確実に料理上手だ。

ご飯は全てディアさんが担当してるらしいから、朝ご飯も楽しみ。
帰った時に舌が物凄く肥えてそう。

「ふうああ・・・ねむっ」

大きな欠伸を一つすると、枕をぽふぽふ叩いて形を整えて寝る体制
に入る。

もう涙は出そうにない。

(私こんなに食い意地張ってたかなあ？これもそれもディアさんの
ご飯が美味しいからだ！)

眼を閉じると、一気に眠りに落ちていった。

08・夢（後書き）

週1更新って言ったそばからさらにUP

まだ陽菜に恋愛感情はありません。

美人で、料理が出来て、優しくて、頼りになる人だと思ってます。

プロローグ含めて9話も進んでやっと1日終了

この話は完結に辿り着けるのか・・・？

（*、、）/PV8000越えありがとうございます！

お気に入り登録、評価もとても嬉しいです！謝謝！

09：ある意味予想通りの訪問客

「ヒナ」

「……………」

「ヒーナー起きて！」

「……………」

「お風呂入りに行くんでしよう」

「う……………」

「お・ふ・ろ！お父様が寝てるうちに行っちゃいましょう？」

「は！そうだった！おはよう、フィルちゃん！！」

「おはよう、ヒナ。さあ、顔洗って着替えましょう」

「はい！」

朝からフィルちゃんの輝く笑顔。バツチリ眼が覚めましたとも！

なんと、この家は水道がキッチンにしか無くて、わざわざ外の井戸まで水を汲みに行かなくちゃいけないんだって。今日はフィルちゃんが持つてきてくれたけど、明日からは私もお手伝いすることにした。なんとたって居候。朝練で早起きには慣れてるから余裕余裕！

服はフィルちゃんの小さい頃の服を借りました。何から何まであげがとうフィルちゃん！

クリーム色のワンピースで所々花のコサージュがついていて可愛い。私にはちよっと可愛過ぎるんじゃないかって言ったんだけど、フィルちゃんに押し切られてしまった。

「おお」

「どう？ここが公衆浴場“ユリア”よ」

「でっかいですね」

「ふふふ・・・さあ、さっそく入りましょうか」

大理石っぽい真つ白な石で出来た公衆浴場は物凄くでっかかった。東京ドーム何個分？！ってくらい広い。早朝だから人は疎らにしかないけど、頑張ればうん百万、うん千万人くらい入るんじゃないだろうか・・・分かんないけど。聞いたらこんなおっきい建物がこの国には十幾つあるらしい。すごいなあ。

「お、おおおおお〜」

「ふふ、どう？気に行ってもらえた？」

「うん・・すっごい綺麗・・・」

「良かった。さあ、入りませうか。見ているだけなんて勿体ないわ」

「はい！」

外装と同じ白い石の壁にお湯の蒸気が舞ってちょっと幻想的。

お風呂の種類はたくさんあって、50mプール並みの広いものや子ども用の浅いもの、ジャグジーみたいに泡がぶくぶくたっているもの、流れるプールみたいなものやお湯が滝みたいにザーザー落ちているものも、怪しい紫色をしたお風呂もある。奥には水風呂もちやんと用意されていた。確実に20種類以上あるぞ！

すごい！すごいよ！こんなお風呂なら女の子じゃなくても長湯しちゃうよね。

あ、ちなみの男湯と女湯は別れてた。まあ、当たり前だよな！

昔のローマやギリシャみたいに混浴じゃなくて良かった・・・。

とりあえず、一番近くのお風呂に入る。

あ！ちゃんと身体洗ったよ！お風呂に入るルールは日本と同じみたい。

「！」

なんか肌がパチパチする。炭酸に指突っ込んだ時みたい。おもしろいなあ。

「このお湯はね、肌にとても良いのよ。私、このお風呂には毎日入るようにしてるの」

「へ〜」

フィルちゃんの美しさの秘訣が今1つ明らかに！

・・・それにしても、ホントにフィルちゃん綺麗だなあ。

顔は勿論だけど・・・身体も、ほら、ボンキュボンって・・・

・・・その凹凸が羨ましい。

チラッと自分の身体を見下ろして・・・眼を逸らした。

いやいや、あきらめるな私！まだ高校生！きつと育ってくれるはず

！！がんばれ私の成長ホルモン！！

その後、2、3つお風呂に入って出た。本当はもっと入ってたかったんだけど、そろそろディアさんが朝ご飯を用意してる時間だと言われて諦めた。

1日の元気は朝ご飯から！はやくディアさんのご飯食べたいな！

「ただいま」

「ただいまー」

「おう！ やつと来たか！ 待ちわびたぜ」

「……………ん？ 今の声誰だ？ ディアさんはそんな男らしい声してないぞ。」

「ゼオさん、お久しぶりです」

「よう！ フィル。相変わらず美人だなあ。飯はたくさん食ってるか？」

リビングの奥。

食卓のいわゆる誕生日席に、椅子の背もたれを抱きしめるようにして座っている男の人がいた。短髪黒髪に蒼眼で小麦色に焼けた肌、30代後半っぽいのに子どもみたいにキラキラ蒼い眼を輝かしている。着崩した服がこれでもかかってくらい似合っていて、矛盾するけど気品のある野生児……………みたいな。自分で考えておいてなんだけど、うん、おかしい。

「ふふふ、ありがとうございます。たくさん食べてこの通りです」

「そりゃー良かった……………お？ その子が“渡り人”か？」

「そう。ヒナ・サクマちゃんっていうんです。可愛らしいでしょう？」

「ああ、そうだな。俺はゼオ・ヘアリツヒ・セルクルだ。よろしくな！」

「あ、はい。よろしくお願いします」

ん？？セルクルって、どっかで聞いたような……………？

「それにしても……………ディア！ お前、両手に花じゃねえか！」

ゼオさんがキッチンに向かって声を上げた。
そっか。ディアさんがリビングにいなかったのはご飯作ってたから
か。

「黙れ、穀潰し」

「ひでえ！」

キッチンからディアさんが出てきた。両手にはホカホカ湯気を上
げるパンが入った籠とサラダを持っている。

くっ！お腹が鳴っちゃいそうだよ……！匂いだけでこの威力。

「ただいま、お父様」

「ディアさん、ただいまー」

「ああ、おかえり。……ヒナ、風呂はどうだった？」

「すごかったですよ！楽しかったです！」

「そーかそーか」

何故か私の言葉にゼオさんが笑顔になった。

「鼻高々だな。公衆浴場建てさせたの俺なんだぜ」

「え！そうなんですか？」

以外とお偉いさんなのかな？どうみても気の良いおじさんにしか見
えないけど。

「まあ、そこは認めてやるよ」

「うんうん。もっと褒めてくれ」

「調子に乗るな」

「手厳しい……」

「おゝそうだぞ。今はな」

「・・・今は？」

「そうそう。2カ月後に退位式があるんだ。それが最後の大事な仕事だ
なあ。早く隠居してえ」

「だからってここに入り浸るなよ」

「えゝ」

「えゝじゃねえ。いい年こいた男が何言ってるんだ」

私が思考停止している間にキッチンからコップとミルク（だと思われ
る）を持ってきたディアさんが、それを並べながら言った。
この2人の関係って何なんだろう？

・・・あと、王様にため口のディアさんって何者なの？

「仲良いですね」

「・・・」

ディアさんがちよつぱり嫌そうな顔をした。え？なんで？！
それに反してゼオさんは満面の笑みになった。

「だろゝ。俺とディアは親友で戦友なんだよ」

「え、戦友？」

「一緒に世界を救ったんだぜ」

「ええゝ」

なんでだろう。すごく胡散臭い。

世界を救ったって、そんなファンタジー

あー、そっか、ここ異世界か・・・

「あ、信じてねえな。本当だぞ！なあ、ディア」

「まあなあ」

「おいおい、そんな返事じゃ信じてもらえないだろ」

「・・・そんなことより、ゼオ」

「なんだ？」

「水汲みはどうした」

「あ」

ゼオさんは椅子から立ち上がってもいない。

私が話しかけちゃったから？ごめんなさい・・・

「お父様。全て整いましたよ」

「よし。じゃあ、ゼオ。お前出てけ。ヒナ、朝飯にしよう」

「はい！」

「ご飯！ご飯！！ごめんね、ゼオさん！私は自分のお腹の方が大事なの！！」

「え、ちよ、ま、待て！」

「黙れ役立たず」

「・・・穀潰しと役立たずだと、どっちのがマシなんだろうなあ？」

「どっちもどっちなんじゃないですか？」

「言いながらもパンを千切る私。ちゃんといただきます！って言ったよ。」

「王様って分かっても緊張しないのは、ディアさんやフィルちゃんのことを見てると、ゼオさんの雰囲気気安いからかな。」

「こっぴつ王様いいなあ。」

「え、え〜！！ちよ、待てって！ようは水がありゃいいんだろ！？」

出す！今出すから！」

「……………まあ、いつまでもグチグチ言われたら落ち着いて食えないし。譲歩してやるよ」

「よっしゃー！」

出す？キッチンの水道から持ってくるのかな？

「ヒナ」

「うわ、はい！」

「まだ見た事なかったよな」

「？何をですか」

「魔法」

「……………魔法！！」

きた！ファンタジーの王道！

やっぱりあったんだ！よっしゃー！……え、生で見れちゃうの！？

「ゼオ」

ゼオさんはフーと息を吐くと口を開いた。

【 我が眷属よ

蒼き息吹をここに在れ 】

呪文を唱えながら、ゼオさんが円を描くように右手を動かす。すると、そこに水の塊がじわじわと現れてきた。

「おー！すーいー！」

私がパチパチ拍手をするとゼオさんが満足そうな顔で胸を張る。

「で、これどうすりゃいいんだ？」

「適当な樽にでも入れといてくれ」

「わかった」

うーわーわーわー！！

魔法！魔法だよ！タネも仕掛けもありません！すごい！

思わずパンを落としちゃったくらい、すごかった！

「うわー・・・すごい・・・」

「ふふふ、口が開いてるわよーヒナ」

「わわ！」

「ヒナの世界には魔法がないのね」

「うん！話の中にはあるんだけど・・・」

「私は使えないんだけど、お父様も魔法使えるのよ」

「え！そうなんですか？ディアさん」

ディアさんを見ると、キャベツ（たぶん）にフォークを刺しているところだった。

それでも、一枚の絵画のように見えるディアさんマジック。

「ああ・・・フィルにヒナの事を伝えた時にも使ったな」

「お父様は風系統が得意で、ヒナが来るって分かった時にそれで伝えてきたのよ」

「え！そうだったんだ！全然気が付かなかったんですけど、いつ呪文唱えてたんですか？」

「俺が風魔法を使うとき呪文は必要ないんだ」

「え？なんでな」

「めーしーしー！」

「うるさい」

「やっと食えるぜ！精霊の恵みに感謝を！あ、フィル。パン取ってくれ」

「どござ」

「はぁ・・・もっと静かにできないのか？」

「何言ってるんだ！飯は楽しく食ってなんぼだろ！」

・・・ゼオさんに思いつきり質問を遮られた。

もう一度聞こうか迷ったんだけど、ゼオさんの食べる勢いが凄くて私の分を取られまいと競うように食べてたら、すっかり質問のことを忘れてしまっていた。

09：ある意味予想通りの訪問客（後書き）

陽菜がだんだん慣れてきて素の喋り方が出始めてます^^

王様出てきたと思ったら2カ月後に退任式

王子達も出せたらいいなと思ってます

呪文ってすごく考えるのめんどくさ・・・難しいですね

タイトルと呪文に物凄く時間を割いてこのていたらく・・・

総PV100000越え ありがとうございます!!

物語りを書く糧になってます）、）、*）感謝！

10：待ち惚け（前書き）

これはひどい……

決して今までの文章が良かったとは思いませんが

これは……どうしてこうなってしまったのか

10：待ち惚け

(ああ・・・太陽が眩しいなあ)

朝ご飯を食べ終わって只今お昼。

何故か私はディアさん、王様のゼオさんと一緒にお城の中に来てい
る。もちろん太陽は見えない。

きっかけはゼオさんのこの一言

『俺、3人子どもがいるんだけどよ、ヒナ、お前会ってみないか？』

王様の子ども〃王子様

いやいやいやいやいやいやいや！！

無理ですって！王様を目の前にしても緊張しなかったのは、ゼオさ
んが気安い性格で、ディアさん達がいたからであって、無理無理！！

なんて言えるわけもなく。曖昧な反応をしていた
ら無理矢理引っ張られて現在に至る。

NO！と言える日本人に、私はなりたい。

王子様が金髪碧眼なんて夢は抱いていない。

異世界召喚小説にでてくる王子様なんて腹黒に決まってるじゃん！

怖い！腹黒怖い！！
だてに召喚系の小説読み漁ってないよ！最近ヒロインの相手だつて鬼畜が多いんだから！

そんなことを考えているうちに目の前には大きな扉。
他の部屋の扉も豪勢なんだけど、ここは別格。
職人さんが精魂尽き果てるまで作り上げたような、気迫と威厳を感じる。

……帰ってもいいですか？

しかし、残念なことに私の手はディアさんに握られている。
迷子防止でまたもやディアさんと手を繋いでいるのだ。回数としては2回と少ないけど時間が長い為、昨日感じていた恥ずかしい！という感覚は無くなっていった。人間の慣れって怖い。
この世界に来てから順応能力が上がっている気がする。まあ、まだ2日目だから混乱してるだけかもしれないけどね。

「よーし！入るぞー！」

ゼオさん、なんでそんな笑顔なんですか？
私とゼオさん（の心の距離）が遠い……

バッテリーーン！！

扉ってそんな音立てて開けるモノでしたっけ？

ゼオさんが扉を開けると、そこには大きな執務机（？）があるだけで誰もいなかった。

拍子抜け、というか何というか・・・

まあ私としては王子様に会わずに済んで有難かったんだけど・・・
・ちよつと、ちよつと残念だったりして。

私はこれぐらいのことしか思わなかったんだけど、ディアさんは違ったらしい。

「ほお」

この一言を口にした後、無表情に拍車がかかった。でもって、ゼオさんが青くなった。

この後。ゼオさんが慌てて私とディアさんを執務室（？）の隣にある休憩室のようなところに押し込み、奥の棚からお茶菓子（バームクーヘンもどき）を出してきて、お茶を入れる道具と一緒に机の上に運び、私とディアさんに椅子を勧めた。

たぶんここまで10秒もかからなかったと思う。

ディアさんは無言でお茶を淹れ始めた。お茶はディアさんが淹れるのが暗黙の了解のようだ。

机の上に置かれたお茶は2つ。私とディアさんの分。

「あれ？ゼオさんの分は・・・？」

そう言うの良い笑顔を返された。今までの中でも最上級に値するんじゃないか、というくらい凄まじい輝きを発している。

はい・・・もう聞きません。すみませんでした。

お茶を飲む。ディアさんが淹れてくれたお茶は文句なしに美味しい。机をはさんで向かいに座っているディアさんもコップを傾けている。何度見ても美しいです。

・・・そしてゼオさんはディアさんに正座しながら謝っている。

「うおおおおお！俺が悪かった！いつもこの時間は執務室で書類捌さばいてっから声かけなくてもいい思ってたんだよ！！いると思ってたんだよ！いや、な？お前が無表情の下で楽しみにしてたのは気付いてたんだぞ！？なにしろ、あいつと最後に会ったの2カ月も前だからな！わかる！わかるぞ！だから、な？俺も早く会わせてやりたくて連絡忘れたって言うか・・・。え？最初と言ってる事が違う？細けえよ！気にすんなよ、そんなこと！・・・はい。すんません。いやいやいやいや！おつまえ、最近のあいつに会ってねえからそんなこと言えんだよ！！すげえぞ！俺、なんで息子があんなになっちゃったのか、わっかんねえよ！！いつペン会ってみろ！絶対分かるから！え？会うために来たのに、お前が・・・いや、そうなんだけどよ！・・・誠に申し訳ございませんでしたあ！！！！たのむ！たのむから、その顔どうにかしてくれ！あいつお前のこと

生き神かなんかだと思っただよ！俺、あいつがお前を崇拜してるって言われても驚かねえよ！むしろ崇拜してるだけ？ってなるわ！お前の機嫌損ねたって少しでもあいつの耳に入ったら俺また説教だよ！あいつ段々お前に似てきて説教臭くなっただよお！長いんだよ！時間が！3日前に新記録更新したばかりだ！半日だぞ！9時から21時だぞ！昼飯も晩飯も食えなかったよ！ありえねえだろ！？ていうか、お前あいつに何教えてたんだよ！？父親は尊ぶもんだって教えなかったのか！？．．．え？一般的には．．．って、俺は！？俺は一般じゃ．．．ああ、うん。まあ、そうだな。王様だったな、俺。は？王族にはさらに厳しくそういうこと躰けるもんなんじゃないのか？．．．あ、え？おいおい、まさか本当に信じるとはってなんだ！お前なんか余計な事あいつらに．．．．．ぐだぐだぐだ」

えー何これ。

後半、話の内容変わってるし。

．．．．．ていうか、この間ディアさん一言も口開いてないんだけど、一体どうやって会話を成立させてるんだろ？
．．．．．こわっ

この会話(?)で分かったのは、さつき入った部屋が執務室であった事と、ディアさんが王子様達に何かを教えていた事、あとゼオさんが異様に息子さんの説教を怖がっている事。

う、うん。ディアさんの正体がまたよく分からなくなったなあ。王子様の先生になれるってことは、頭が良くて、それなりに地位も高いってことなんだろうけど．．．。

だからって王様とあんなふうに接することができるか？っていうと

否だよね。

いまいち緊張感に欠ける。

ゼオさんって王様なんだよね？いいのかな？こんなに頭下げて・・・土下座する勢いなんだけど。

それにディアさん、そんなに怒ってるようには見えないんだけどなあ？

どっちかっていうとゼオさんの反応見て面白がってる感じ。

そう思いながらディアさんを見ると、バチツと眼が合った。まさかのタイミングにちよっとうろたえる。すると、ディアさんが悪戯っぽく笑って軽くウインクしてきた。

.....
.....
.....

きゃ、きゃー！

やば、やばい！やばい！！ディアさん可愛い！年上の男の人に言うことじゃないけど、可愛い！

ど、どうしてこの人はこうも心を掻き乱すというか、ざわざわさせるのが上手なんでしょう、か！？

あー！心臓ばくばくいつてる！不意打ち禁止！！

すでにディアさんは無表情に戻ってゼオさんの方を見ている。

落ち着かない私はお茶を一气飲みすると、ポットに残っているお茶も全て飲み干した。

熱いけどかまうもんかー！

ちなみに、この間もゼオさんは謝罪というよりも愚痴？を続けていた。

どうしよう。することがない。

お茶は全て飲んじゃったし、バームクーヘン(?)も食べた。

ゼオさんは今だに愚痴を続けてるし、ディアさんは聞き飽きたのか、眠そうに眼をぱちぱちさせている。

うん、可愛いよ。ディアさん可愛いよ、それがどうした！

ふう、落ち着け私。もう、何でここにいるのかも分なくなってきた。ちやっとなあ。

バターーーン！！

びっくう！

な、何？ゼオさんが扉を開けた時と同じ音がしたよ！？

「父上ー！ー！！何で先生が来てるのにさっさと教えないんだー！！！！」

「……あゝあ。ほら、やっぱりね。最近はずいぶん忙しい王子様がいらないんだよ。……たぶん」

10：待ち惚け（後書き）

陽菜が王子は基本腹黒と主張してますが全然そんなことないですからね！

この小説家になろう！にも魅力的で紳士な王子様も可愛い王子様もワイルドな王子様も沢山いらっしやいますから！

陽菜の独断と偏見です。いったいどんな小説を読んだのか是非とも教えていただきたい。

ゼオがディアに謝りまくってますが、ディアが怖いんじゃないで、その後の息子の説教が恐ろしいんです。

で、ディアはそれを分かっててゼオをからかってる・・・と。

この2人すごく仲良いんですよ！

表現しきれませんが・・・

またそのあたりも掘り下げたいです

・・・この小説、話が進むたびにキャラの性格が歪んでいっているような気がするんですが、気のせいですよね！

PV13000越え！！ありがとうございます！

他にもお気に入り登録や、評価に本当に感謝です！

11：第一印象なんて当てにならない

「先生、お久しぶりです！」

「ああ。久しぶりだな、イル。元気そうで何よりだ」

「はい。最近は書類を捌くのに慣れてきて、十分な睡眠もとれているのでバッチリです。ちゃんと先生の言い付けも守ってますよ」

「そうか。・・・よくやっってるみたいで安心したよ」

ディアさんが子どもを見守る親のような顔で王子様のイルさんを見つめる。

イルさんはイルさんで、大好きなご主人様に褒められて尻尾を振り回す犬の如くキラキラした眼をディアさんに向けている。

うん。2人の関係が良く分かる光景だ。

イルさんはディアさんが大好きなんだろうなあ・・・。

「ぐっ・・・イルの野郎お、ディアにはデレデレしやがって。・・・
いてて」

腰をさすりながら立ち上がるゼオさん。

扉を開けて突入してきたイルさんが、その勢いのままゼオさんに飛び蹴りを喰らわせたからだ。

王子様なのになかなか行動的というか感情的というか・・・
お父さん・・・しかも王様にそんなことしても良いのかな？

「ヒナ」

「へ？あ、はい！」

ちよつと離れてみんなの様子を眺めていた私に、ちよいちよいとディアさんが手招きする。

う、王子様もこっちを見ている。

凝視されているわけではないけど、やっぱり緊張するものはするのだ。

なんてつたつて、この王子様も例に洩れず美青年。

お父さん譲りであろう黒髪蒼瞳。黒い髪は肩で綺麗に整えられ、蒼い垂れ目がちな眼が大人の艶を出している。あんな入場をしてきたとは思えない程、高貴な雰囲気が出ていた。まあ、ディアさんには敵わないけどね！ディアさん以上の美人がいたら、きつと直視した瞬間倒れると思う。

「イル。こいつが“渡り人”のヒナ・サクマだ」

「は、はじめまして」

ディアさんの隣に立つと、そう紹介された。

背中に添えられたディアさんの手に安心しつつイルさんを見る。

イルさんはにこりと笑うと、片膝をついた。私の眼の前で。

「え？え？」

混乱しているうちに右手を優しく持ちあげられる。

こ、これはもしかして……！

「はじめて、可愛らしい“渡り人”。私の名前はイラルディ・ヘアリツヒ・セルクル。イルと呼んでください。よろしく、ヒナ嬢」

そんな馬鹿な！ありえない！私が1人浮いてしまっじゃないか！

「おい。俺の事、忘れないでくれよー」

「なんだ、いたのか」

「父上、まだいたんですか？」

「ひでえ！……ディア、茶あ淹れてくれ」

「……はあ……まあ、いいか」

「あ、先生！私も手伝います」

「ああ」

「デイ、ディアさん！私は……」

「ゼオの相手してやってくれ」

「子守りですね！了解です」

「おいこら、ヒナ！」

「良く分かってるな。頼んだぞ」

大真面目に頷くディアさんに私も真剣な顔で頷き返した。

「こらこらこら！なんでお前らはそんな失礼なことしか言えないんだ？ヒナまで感染しやがって」

「感染って……嫌な言い方しないで下さいよ」

「間違っではないだろ」

「う、うん？」

確かに王様に気安くしすぎだとは思っけど……
……ゼオさんだもんなあ

「仲良くできてるみたいで安心しました」

「うん。みんな親切にしてくれてるよ」

「うんうん。仲好き事は美しきかな！ですね」

ここはディアさん邸のリビング。

私の前に座っているのはロツソ君だ。

ゼオさん、イルさん、ディアさん、私の四人でお茶を飲んだ後、イルさんがお仕事に戻ったのをきっかけになんとなく解散した。もう二度とごめんしたいけど、ゼオさんの子どもはまだ2人残っている。こ、こんなやり取りを後2回も……。うん。考えるのやめよう。

で、家に帰って来ら居たのがロツソ君だ。

私に会いに来たらしく、フィルちゃんとお喋りして時間を潰していたらしい。

ディアさんが遅い昼食を作るのを待ちながら、ロツソ君と無駄話をする。

「昨日はクドナさんのお説教で1日が終わっちゃいました・・・僕、クドナさんのこと尊敬してるんですけど、あの説教の長さだけは何とかならないかなあ。昼ごはん食べ損ねちゃいましたよ」

「クドナさんってどんな人なの？」

「クドナさんは凄いですよ！ディアさんの元弟子で、水、火、土の3柱の精霊と契約を交わしてるんです。1柱の精霊と契約するだけでも凄いのに、3柱ですよ！3柱！」

「へえ」

ロツソ君の眼が輝いてる。ほんとにクドナさんを尊敬してるんだな・・・でも、机の上に乗りに出すのは行儀が悪いぞ。せっかく私が拭いたのに。

精霊っていう単語がこつも普通に出てくるあたり異世界だな・・・何度実感しても足りないや。

「クドナさんがすごいのはよく分かったけど、精霊と契約するってどういうことなの？」

「う、えーえつとですね。精霊との契約っていうのは、あ、あれです！前約束です！」

「前約束？」

「はい。僕たちは魔法を使うときに精霊の力を貰っているんですが、え〜と。ある場所に1柱の水精霊と2人の精霊師が居たします。

あ、僕達は精霊のことを柱で数えるんです」

日本で神様を柱で数える感覚と同じなのかな？

「・・・で、精霊と契約していない2人が同時に同じ水系統の魔法を放つと、合い打ちして終わります。魔法を使うことに契約の有無は関係ないんですよ。」

「・・・ここで、2人の内のAさんがその水精霊と契約をしていたとしましょう。この時、さっきと同じ事を起こすとAさんの魔法がもう1人の魔法を押しやっけてしまいます。つまりAさんが勝ちです。つまり、契約しておく魔法を使ったときにその精霊に優先的に力を譲ってもらえるってことです」

ここまで言っていてロツソ君が不安そうに私の方を見た。

「あ、あの、分かってもええでしょうか？僕、説明とかどうも苦手です・・・分からなかったらバシバシ言っして下さい！」

「あ、大丈夫だよ！契約すると他の人より力をたくさん貰えるってことだよね？」

「ほっ・・・そうです、そうです。そんな感じ」

安心したような顔をしたロツソ君を見ると、どうも母性本能が擦られる。

こう、犬を見てるとわしゃわしゃしたくなる感じ。

ふと、美味しそうな匂いが漂ってきた。

ご飯だ！！

11：第一印象なんて当てにならない（後書き）

前回の更新から約3週間も放置してしまっでごめんなさい！！！！
部活の合宿とか、その合宿の疲れと日ごろの不摂生で熱出したりしていたら

こんなに時間が経ってしまったていました！

ほんつとつにすみませんでした！！

ちゃんと早寝早起きします！

この小説は別に逆ハーレムを目指している訳でもないのに

男ばかり増えていきますね・・・

主人公を除いて女の子がフィルだけとか・・・

クドナさんはまだ名前だけだし・・・頑張ります

PV18000越え感謝！！

本当にありがとうございます！！

12：ディアさんの魔法講座1

「2人でなんの話してたんだ？」

軽い昼食を食べ終わり、食後のお茶を私、ディアさん、ロツソ君、フィルちゃんの4人で飲んでいると、ディアさんがそんなことを聞いてきた。

「精霊との契約についてロツソ君に教えてもらってたんです」
「ロツソが・・・教える・・・？」

物凄く怪訝そうな顔をしたディアさんがロツソ君を見やる。

ロツソ君は明後日の方を向きながら、お茶を啜った。

「ヒナ。ロツソの説明で理解できたか？」

「え、はい。・・・たぶん」

「はい」と言った後、ディアさんにあまりにも疑わしげな顔をされたので、最後に余計な一言を付け加えてしまった。

なんでロツソ君が説明したというだけで、こんな顔をされるんだろう？

頭の中の疑問が顔に出ていたようで、フィルちゃんが苦笑しながら教えてくれた。

「ロツソは学院でいつも赤点ギリギリを取る……いわゆる、おちこぼれだね。こういう理論的に他人に説明することが得意じゃないの。だって、まず自分で理解できてないんだから、教えられる訳ないわよね」

「フィルちゃん、酷い言い方しますね」

「あら？間違っただこと言っただかしら？」

「全てフィルちゃんの言うとおりですー」

かなり酷い言われ方をしてると思うんだけど、目の前の2人は気にしてないみたい。

ロツソ君なんかは満面の笑みを浮かべているし。こういう軽口が言い合えるくらい、この2人は仲良しなのかなあ。私と光里、祐貴ちゃんとの関係に似てる。

「で、どうやって説明されたんだ？」

「えーと、前約束とか、契約しておくとか有利だとか？」

「……間違っちゃいないが」

「まず基礎をちゃんと教えたのかしら？」

「う……お、教えてなかった、かも、です」

「おいおい」

「面目ないです」

しょんぼりしてしまったロツソ君をフィルちゃんがつつく。その笑顔が嬉しそうなのは、ロツソ君をかまえて楽しいからなのか、反応

が大きい（今も顔が真っ赤だ）ロツソ君で遊んでるのか。いまいちこの2人の関係も掴めないなあ。

そんな2人の隣で眼を閉じて「うん・・・」と唸っていたディアさんが、一つ頷くと眼を開いた。

「まあ、しばらくは此处にいるんだし、知っておいて損はないだろう」

「え？」

これは、ディアさんから説明してもらえるとということなんだろうか？ さっきの会話でロツソ君の説明が正しいのか不安になってきたところだったから、もしそうだったら有難いなあ。

「ヒナ、精霊がそこらに存在してるってことは聞いたか？」

本当に教えてもらえるらしい。やった！

えーと、そこらに存在してる・・・そんなこと言ってたっけ？ 思い出せない。

「？」

「・・・ロツソ。基礎の基礎だぞ」

「ごめんなさい・・・」

言われてなかったらしい。ロツソ君大丈夫かなあ。

まあ、私も人の事言えるほど頭良かった訳じゃないけど・・・。

またもやしよんぼりしたロツソ君の頭をディアさんがペシッと叩いた。

「・・・よし。簡単に説明すると、だ」

「はい！」

「俺たち魔術師が魔法を使う時、必ず精霊の力を借りてる。

精霊は大きく分けて火・水・風・土の4種。使いたい魔法の系統に応じて精霊への呼びかけ方を変えるんだ。

例えば、今日の馬鹿王が言ったのは「我が眷属よ 蒼き息吹をここに在れ」。これはちよつと特殊な例だが、「我が眷属」と「蒼き」ってというのが水系統の精霊への呼びかけになる。もし、これを火系統にしたいなら【蹂躞者】とか【赤き】、【怒涛の先駆者】とか・・・その魔術使う奴のセンスで変わるな」

【蹂躞者よ 赤き息吹をここに在れ】

ディアさんが手を少し持ち上げながら呟くと、その手のひらの上に小さな炎が生まれ、シュルシュルと消えていった。

「そして、精霊はそこらにいていっても、精霊と土地との相性がある。それによって、その場に存在する精霊の比率が変わるんだ。

例えば・・・砂漠なら火が多くて水が少ない。湖の近くなら逆。森や林だと土と水が多くて火が少ない。風は例外で、ほとんど場所には影響を受けないから何処にでもそれなりにいる。そうだなあ・・・精霊の数にも限界があると思えばいい。

でだ、魔術を使う時はさつきも言ったように精霊の力を借りる。

その時に必要なのが精霊が喜ぶ言葉と意志の強さだ。

実践してみるか・・・」

ディアさんは立ち上がると、私達から離れた。

「見てろよ」

「はい」

何だかワクワクしてきた。何を見せてくれるんだろ。

さつき魔法を使う時にチラッと見えたディアさんの真剣な表情は、うん。その、まあ、すごくかつこよかった……。

そういえば、ゼオさんも呪文唱えてる時は真面目な表情してたなあ。真剣に物事に向き合ってる男の子（この場合は男の人）ってかつこいい、と思う。

手のひらを上にして腕を伸ばすと、ディアさんは口を開いた。

「まず、火。さつきは【蹂躪者よ 赤き息吹をここに在れ】だったな。なら、」

【先駆ける者よ 慟哭の狼煙を上げよ】

ゴオオオオオ!!!

「わあ！」

さつきとは比べ物にならないくらい大きな炎がディアさんの手のひらに現れた。

いや、これは本当に危ない！ディアさんの手、溶けてないよね！？大丈夫だよね!!!？

いらぬいお世話だと分かっているも心配いしてしまう。だってこれ、本当にすごい量だよ!？

「えええ！すごい！すごいですけど、ディアさん大丈夫ですかあ!？」

「ああ。問題ない」

すぐにギョルギョルと炎を消したディアさんが、ひらひらと炎をのせていた手を振った。
近寄って見てみると、焦げ1つ残ってなかった。……よかった一応、確認の為にその手のひらを擦る。うん。相変わらず40代とは思えないスベスベの手だ。
しばらく、この感触を楽しんでみる。私もいつまでもこんな肌でいたいなあ……羨ましい。

「……もういいか？」
「え？あ、」

気付いた。というか、正気に戻った。私は今、ディアさんの手を握っているのだ。しかも、結構距離が近いぞ、これ。

わあ！ディアさん睫毛なが〜い

……はっ！わ、私は一体何を！？

「うわ！ごめんなさい。怪我がないなら良いんです！はい！失礼しましたああ」
「ああ」

くそう。ディアさん顔色一つ変わらないぞ。自分から触っというてなんだけど、取り乱した私が馬鹿みたいじゃないか！
……手を繋いでる時は、恥ずかしかったけど、今は……いや！今も恥ずかしい！恥ずかしいけど、なんか違う。うん。なんだろ？

「ヒナちゃん、可愛いわ。私は魔法初めて見せてもらった時、あんな反応できなかったなあ」

「そうだね。でも、そんなフィルちゃんも可愛いと思うよ」

「ふふ、ありがと」

え？この2人付き合ってるんですか？

なんだか、けしからん会話をしているフィルちゃんとロツソ君。視線は2人ともこっちを向いてるから、一瞬幻聴かと思った。

というか、ロツソ君。君さらっと何言ってるんだ。私をだしにしてイチャつかんでくれ。

「実践は、これだけでいいか。一応全系統を見せておこうと思ったんだが……まさかこんなに気にされるとはな」

「！す、すいません。余計な心配しちゃって」

「いや……心配されたのは予想外だったが、嫌だった訳じゃない。そうだな……」

ディアさんは途中で言葉を切ると、くしゃくしゃと私の頭を混ぜた。

「わっ！」

そして、そのまま何事もなかったかのように元の位置に座り直した。会話が聞こえていなかったらしい2人が普通に話しかけている。

ちよ、「そうだな……」の続きが気になるんですが！

あ、頭撫でられたからって誤魔化されたりしないからね！と思いつつも、無言で椅子に座る。

顔が熱いのは気のせいだ！！

まったく、これだから美形は！

「ヒナ」

「ひゃい！」

は、恥ずかしい……。声、裏返った。

「ここまで、理解できてるか？」

「あ、はい！バッチリです」

実際に見せてもらっている分、ロツソ君の何倍も分かりやすかった。ごめんロツソ君。

「今見せたみたいにな、同じ効果でも言葉を変えることで威力を上げたり下げたりできる。ここまでが基礎だな。」

本題の契約だが、精霊というのはその大地や空間に縛られている。ロープで巻かれるような意味じゃないぞ？……。大地に所属している、とでも考えてくれ」

「はい」

「で、契約するのは精霊の所属を大地から自分自身に移らせる事を言う。」

「どこでも、その精霊の力を借りられるようになるんだ。」

「あ、それがロツソ君の言ってた前約束？」

「たぶんそうだろうな。ちょっと古い説のような気がするが……。ロツソ？」

「うっ、ごめんなさい」

ロツソ君が肩を落とす。

「最新の論文には目を通しておくように言っているだろ？」

「うう〜」

「しかも、俺が話したのは10何年か前に発表されてた筈だよな」

「ううう〜」

「ダメね、ロツソ」

縮こまって、どンドン身体を小さくしているロツソ君。
ごめん。フォローできない。

12：ディアさんの魔法講座1（後書き）

お久しぶりの更新ですごめんなさい

作者が今年受験生ということで、これららもちよくちよく更新が遅れそうです

楽しみにしてくださっている方、ありがとうございます

受験終わり次第、また頑張って更新していこうと思っているのでもうしばらく待っていたいただけると助かります（、、、）

今回ちょっと恋愛小説っぽいことを微かにしてくれました、がうくん。ラブラブには程遠いですね

陽菜の心の動きも曖昧・・・精進します

妙なところで切れてしまいました

ディア先生の魔法講座はもうちよつと続きます

次回は加護の説明が出来るの良いな・・・

13：ディアさんの魔法講座2（前書き）

たいへん遅くなりました・・・

今後も不定期更新になりそうです（、、；）

ごめんなさい

13：ディアさんの魔法講座2

「ロツソの事はクドナに任せるとして・・・続けるぞ」

えゝそんなあ！クドナさんに言うのだけは勘弁して下さい！！と叫んでいるロツソ君を軽やかに無視したディアさんは、少し冷めた紅茶を飲み干し口を開いた。

「契約の利点は幾つか挙げられる。

1つ、さっき言ったように場所の特性に縛られずに魔法を行使できること。

2つ、威力が調節し易くなること。

精霊つてのは、やっかいだな。その時の気分によって力の貸し方が変わってくるんだ。気分が良ければ多く、気分が乗らなければ少ない。後、人間の好き嫌いが激しい。例えば、今日ゼオが使った魔法あいつが使った時は樽が半分埋まるくらいの量だったが、一般的な魔術師が同じ魔法を使っても手のひら一杯が精々だ。

契約すると、精霊の機嫌に関係なく魔力を引き出す事が出来る。」

そ、そんなに違うんだ・・・
つてことは、ゼオさんはそれだけ水の精霊に好かれてるってことだよね。へへ

「3つ、箔が付く。
精霊と契約するには、それなりの魔力と精霊に気に入られる人格が必要だ。後、力の強い精霊を呼び寄せる魔方陣を創る才能もいる。精霊と契約出来たつてことは、それらすべてが認められたつてことだからな」

「へえ・・・じゃあ3つも契約してるロツソ君の上司？のクドナさんつて本当にすごいんだね」

「そうですね！1柱だけでも数えられる程しかいないのに、3柱なんてこの世界に5人もいないんじゃないですか？」

「そうだな」

「あ、じゃあ、ディアさんは風の精霊と契約してるんですか？呪文なくても魔法使えるんですよ？」

私が来る事を知らせたアレ！

「いや。俺はどの精霊とも契約していない」

「え？そうなんですか・・・じゃあ何で？」

「あゝ・俺はアイライズ族っていう部族の血筋で、ちょっと特別なんだ。これ説明し始めると話が逸れるから、また今度な」

「はい」

そういえばディアさんのフルネームってディア・アイライズだったっけ。

特別とか、すごく気になるけど我慢。いかにも訳ありみたいだし、ディアさんの困った顔はあんまり見たくない。

「精霊との契約の説明はこんなもんかな。ついでに、さっきイルがしてた加護について簡単に話そうか」

「お願いします」

くっ！ディアさんがイルさんの名前出すから思い出しちゃったじゃないか！

あー！あー！忘れるのよ、私！！

またもや熱を持ってきた頬を擦りながら、ディアさんの声に耳を傾ける。

「セルクルの王族は代々水の精霊との相性が良いんだ。これを説明すると建国記まで話さなくちゃならないから保留。」

で、加護っていうのは精霊に愛された人間が、その気に入られた精霊の属性の恩恵を受けられることを言う。加護を受けた人間を加護

持ちと呼び、大切にされる事が多いな。

恩恵っていうのは・・・ゼオのように水精霊の加護を受けている場合、溺れなくなる。泳ぎが上手くなる。あと、魔法を使う時に少しの魔力で大きな魔法を行使できる」

「へーいろいろ便利なんですね。あれ？でも私、精霊に気に入られたわけじゃないですよ。イルさんが手の甲に、キ、キスしただけです」

斜め前から「照れてるの？可愛いわ」「あ、あのさ、フィルちゃん。今度の休みに『召喚式とその応用』って講義があるんだけど、よかつたら一緒に」「イル様って天然紳士よね」「・・・そうですね」
って会話が聞こえてくる。

ロツソ君・・・可哀そうな子。関係無い会話をしてることに怒るよりも、ロツソ君への憐れみの方が勝ってしまった。

でもね、ロツソ君。もしちゃんと聞いてたとしても、その誘い文句じゃ無理だったと思うよ・・・。

「ああ。加護とは言ったけど、違う。イルがしたのは、加護のお裾分けみたいなもんだな。加護持ちよりかなり薄いが恩恵を受けられる。損することはないから、気にしなくて良い」

「はい」

てことは、水に沈んでもしばらくは大丈夫なのか。今日、銭湯で試してみよう！

うーん。それにしてもイルさん。もうちょっと別のお裾分けの仕方

なかつたのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8005/>

黒い瞳と紅い瞳

2011年3月1日04時22分発行